

第5章 考 察

(1) 和歌山県における経塚

中村 浩道（和歌山県立紀伊風土記の丘館長）

はじめに

経塚とは、平安時代の後半、末法思想の流布に伴い、仏教書の保存のため、經典などを地中に埋納したもので、中央貴族を中心に行われた。日本での造営は、寛弘4年（1007年）、藤原道長が大和国金峰山山頂に造営した金峰山経塚が最古で、はじめは貴族層が末法の危機感から弥勒下生に備え、經典を後代に伝えようとした意図があった。当初は京都を中心とする貴族階層で流行したが、やがて中世には廻国聖が諸国で納経活動を行って庶民の間に広まり、現世利益や追善供養の意味が付加され、拡大していった。

県内の経塚調査研究史

和歌山県内では、熊野三社及び高野山奥の院では早くから経塚の埋納が開始されており、すでに江戸時代にはそれらの発見報告が見られる。文政8年（1825）社地の石垣を修復するため石材を採取した時、崩落した砂礫の中から経筒が出土したという熊野本宮経塚は、その最初である。

埋納品は、銅製経筒、陶器製外容器、仏像が各1と、銀器残欠若干である。このうち経筒は高さ31.6cm、径33cmで、現存する経筒の中で最大の容積を持つ。蓋は緩やかに甲盛りのある被せ蓋で、その頂に突起状の紐をつけている。筒身は太く大きな銅板製の円筒である。陶製外容器は、高さ39cm、径41cm、であり、次の銘文7行61文字が外側に線刻されている。この銘文から保安2年（1121）大般若経600巻を50巻ずつ12分して埋納され

たことがわかる。銘文は以下のごとくである（阪田宗彦 2002）。

（陶製外筒 筒身刻銘）

熊野山如法経	銘文
大般若経一部六	百巻
白瓷箱十二合	
箱別五十巻	
保安二年	歳次辛丑十月日
願主沙門良	勝
檀越 散位	秦親任

このほか『紀伊続風土記』によると宝暦7年（1757）に若一神社社殿を修理中に発見された比井経塚がある（和歌山県 1983）。

近代に入ってから、熊野三所権現の一つである夫須美神社の西約5町のところで、郷社飛瀧神社への参詣道路の左側に俗称沾池の付近の保安林が解除され、銅仏、仏具など150点余りが出土、採集された（第1回）。第2回目の発掘は、大正7年3月17日である。第1回の発掘において仏像仏具などを得たことから、さらに多くのものが埋納されている可能性を持って、多くの新たな参加者を得て掘り出したものである。この時には経筒61個分など106点が出土採集された。第3回は大正13年3月飛瀧神社境外、所有地において岩窟内から三鈕素文鏡、白磁香炉、陶製碗の3点を採集した。

以上の各回の採集品は東京国立博物館に寄贈され、調査研究が行われ、『那智発掘仏教遺物の研究』として報告、出版されている。

次に昭和5年の発見がある。この年には2回にわたって発見があり、第1回目は、郷社飛瀧神社参道清掃のため地均し中に偶然遺物を発見したもので、保元元年銘および建久3年

銘などの経筒 43 点他、観音菩薩像など 3 体などが出土した。第 2 回目は同一地域においてさらに、古銭 7 点、経筒 6 点が出土した。

さらに昭和 39 年には飛瀧神社境内で碎石中に経筒片、同蓋、古銭、高台付き銅器片などが出土している。

やがて昭和 39 年から 40 年にかけて青岸渡寺防災道路工事に伴う緊急調査として和歌山県教育委員会が発掘調査を実施した。遺物の散布状況から 27 箇所の遺構の存在が推定されている。出土遺物は甚大な量に及び、特に山茶碗、小皿が全体の 80% を占めている。

昭和 43 年、44 年には 3 回にわたって那智大社が主体となり、國學院大學大場磐雄団長の元、発掘調査が行われた。第 1 回は、昭和 43 年 8 月 20 日から 27 日まで、第 2 回は同年 10 月 9 日から 20 日まで、第 3 回は昭和 44 年 8 月 1 日から 15 日まで行われた。調査は参道入口から約 60m の間にわたる両側の地域で行われた。

出土遺物は、金属製品—経筒約 50、鏡 6、仏像 1、懸仏像類一括、古銭 300 以上、そのほか剣身、刀子、短刀、鉄戈、火打ち鎌など、陶磁器類—中国陶磁（四耳壺、合子、椀、花瓶など）、常滑焼（甕—経筒外容器約 20）、渥美焼（経筒約 70、甕、壺、山茶碗、小皿、大平鉢など）、瀬戸焼（四耳壺、瓶子、山茶碗など）である（石田茂作 1928、東京国立博物館 1985、大場磐雄・小山修三 1970）。

なお主たる在銘片は以下のごとくである。

- 鋳銅製経筒、高 30cm、口径 21cm

美濃国土岐郡延勝寺御庄

州田郷法明寺

八郡如法経一口有縁無縁

出離生死頓証菩提為也

保元元年九月廿二日

取筆僧道西

莊嚴結縁衆

物部守貞秦氏

- 鋳銅製経筒、高 30cm、口径 21cm

信濃国伊那郡伊賀覽御庄

中村郷光明寺

如法経八部奉書写

保元元年九月八日

願主僧願西

- 金銅経筒片

承安元年元年癸巳三月十七日

- 梅樹双雀鏡

治承二年 飛瀧権現

- 鋳銅製経筒、高 22.4cm、口径 8cm

大中臣口法

建久三年六月十五日

関氏女

- 銅板製経筒、高 13.8cm、口径 5.8cm

南無妙法蓮華経一部

右意趣者焉相当禪瑞

聖霊一周忌所奉願頌徳

六十六部結願証菩提

往生極楽

応安二年^レ卯月十七日

下総國木内庄廻山

行阿弥並孝子敬白

- 銅板製経筒、高 13.8cm、口径 5.1cm

越後国刈羽郡北条口呂

十羅刹女本^レ戊子年

（梵）奉納大乘妙典六拾六部

三十番神

大永八年戊子二月吉日

- 銅板製経筒、高 9.8cm

越后住人 宗法

十羅刹女

（釈迦種字）奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神

享祿三天^ヲ庚 今月日

爲道秀妙戒也

大正 4 年（1915）頃、丹生神社社殿背後の地ならし工事中に発見された丹生神社経塚、大正 5 年（1916）頃、同地の八幡神社仮屋の石地藏祠修復のため、基壇を移動したところ、

下層から和鏡4、青白磁合子数点、刀子の破片などが出土したと伝える広井原経塚、明治末年に偶然に発見されたと伝えられ出土遺物は願成寺に保管されている願成寺経塚など偶然に遺物などが発見され本格的な調査が行われていない例は数多くみられる（巽三郎ほか1953）。

比井経塚は、昭和37年、出土地点確認のため、拝殿の南50mにある基壇状遺構の一部を発掘調査した結果、外容器を抜き取った痕跡と思われる石組遺構と、壺甕片が検出されたという（和歌山県1980）。

なおかつての発見場所を再度確認調査した例は、昭和50年2月に田辺市上秋津文化財保存会が発掘調査を実施し3基の経塚が丘陵傾斜地に並んでいることを確認し、それらの結果と昭和6年調査と一致した高尾山経塚などがある（伊勢田進1974）。

また大藪経塚は、昭和48年9月墓地拡張中に経塚が発見され、県教育委員会が調査を行ったが、既に削平されていた事から埋納状態は不明である。当時、墓地拡張を担当した慶勝寺総代から出土状態を聴取している（和歌山県1983）。

また昭和34年4月、粉河寺本堂裏にある粉河産土神社背後の風猛山南斜面、標高80mの雑木林中に石の下から経筒を、同年7月に経塚付近を整備中再び2基の経塚および井戸を発見、それらを第2号、第3号経塚とし、最初に発見したものを第1号経塚として調査が行われた。これらは偶然発見された経塚ではあったが、その際に調査が実施されたもの、あるいは後日に調査が行われた例である。出土した経筒銘文は陰刻で次のように記している（羯磨正信・壺井公彦1959）。

奉納妙法蓮華經一部八卷

天治二年九月五日癸酉助教清原

信俊勸進六口大法師願尊 良忍

勝聞 堅俊

忍昭

四七日間

聞覚

於芹生別所如法

如説奉書写畢。是依爲靈驗、

所奉埋粉川宝前也。願以此

善根、生兜率内院、結縁衆相

共、値遇慈氏尊、法界衆生

平等利益。敬白。（『経塚遺文』）

なお『本朝新修往生伝』によれば、信俊は如法経を書写して名山霊寺に送ったとあり、本例以外にも鞍馬寺経筒（国宝）にも彼が保安元年（1129）に追善供養の目的をもって埋納している。

新宮経塚群は、千穂ヶ峯を手法とする権現山にあり、神倉山、庵主池、如法堂経塚群に分かれる。いずれも熊野速玉大社を中心に造営された経塚群で、古来、聖地として信仰の対象となっていた。幸い破壊される以前に発掘調査をすることが出来た点で、那智山経塚とはやや趣を異にする。

高野山奥之院遺跡（石田茂作ほか1975）は、昭和40年弘法大師開創1150年に当たったので、その記念事業として御廟前の灯籠堂改築と御廟の端垣修理、植樹を行った。この時多数の遺物が出土したので、調査委員会によって調査が行われた。

灯籠堂地区とする地域では、昭和37年6月、新灯籠堂の基礎工事中に多数の納骨器と一石五輪塔などが出土した。しかし工事を急いだためか、工事完了後になってようやく散乱した遺物を収集し、層位を一部確認する程度に終わったのは残念であった。

出土遺物は陶磁製納骨器があり、国産では瀬戸窯（灰釉三耳壺、仏花瓶、小壺、茶入れ、水滴など）、常滑窯（灰釉四耳壺）、土師器（正中三年銘蓋付小壺、燈明皿）、瓦質小壺など、中国製陶磁では南宋白磁四耳壺、水注、北宋の青白磁合子、皿などがある。金属製納骨器には、筒形納骨器、同小型形納骨器、同蓮弁形納骨器があり、他に竹製納骨器が出土して

いる。

御廟内地区は、奥之院御廟地域が該当し、空海入定の地として弘法大師信仰の中心であり、禁足の霊地でもある。このため遺物の出土体は不明であるが、御廟内の表土下で集中的に発見された。ここでは多数の納骨器と共に経筒も出土した。

出土遺物のうち国産では瀬戸窯（灰釉三耳壺、同四耳壺、卯花文壺など）、常滑窯（三筋壺）、渥美窯（広口壺）、須恵質（甕）、十瓶山窯（広口壺）、瓦製（筒形容器、小壺）中国製陶磁では、北宋から南宋時代のもので青白磁合子残欠多数のほか、青磁有蓋鉢、花瓶、水注、瓶子、白磁四耳壺、褐釉瓶子、四耳壺、天目茶碗残欠などがある。金属製納骨器では、正応5年（1292）在銘銅製納骨器をはじめ、多くの青銅製筒形納骨器、鉄製納骨器、和鏡、宋銭など、又金銅仏の胎内と五輪塔の一部に穴を穿って納骨用としたものもあった。

天永4年（1113）在銘経筒は御廟の端垣に近い地下1mの処で偶然発見され、陶質の外容器は筒形で上端に小孔がある三耳を付け、印籠形の蓋がついていた。その裏面には「諸行無常是生滅法々已寂滅為樂永久二年甲午九月十日壬午奉埋之尼法樂」の墨書銘がある。またその外容器内に円筒形土製経筒がおさめられ、筒の上には方形の枠内に「天永四年癸巳五月三日壬午比丘尼法樂奉書写之矣。」と銘文が陽鑄されている。経筒内に円筒形桧材の漆塗容器があってこの容器の底に経巻11巻、供養目録、法樂願文を経秩で包納して組紐で結び、さらに麻紙で包んで納入されている。このように内容はきわめて豊富で、保存の良好な資料は、わが国経塚遺物の中でも特に優れたものといえる。なお、法樂願文の末尾には、「為期弥勒慈尊出世之時殊占弘法大師入定之地而已仰願慈尊兼憐愍期願伏請大師常護持斯經必按其三会之席（中略）永久二年三月十五日比丘尼法樂敬白」とある。この法樂尼は、曼荼羅裏面の墨書銘から永承7年に生まれ、

埋経が行われた永久2年には63歳であったことが知られる。

以上が遺跡、遺物の概要であるが、御廟内では平安時代末に埋経と納骨が同じ場所で営まれている点に注目したい。納骨が中心で、御廟周辺では平安時代末から鎌倉時代のもが多く、納骨容器も中国宋代の舶載陶磁器や鎌倉時代の瀬戸窯などで、当時としては貴重な容器を使用していた。また、経筒と同系の銅製筒形容器を使用するのに対して、御廟前方の灯籠堂敷地内の出土のものは、一部御廟内と同じ遺物を含んでいるが、瀬戸窯でも小型の各種容器を利用し、銅製筒形容器なども小型のものが多く。地下の純骨層から考えて、高野聖によって諸国からあつめられたもの、あるいは個人の納骨されたものを一括埋納したのであろう。時代も鎌倉時代から江戸時代初期までに及んでおり、高野聖の回国、納骨活動と中世庶民信仰を知る資料といえよう。

ここで埋経が行われたことは、高野山を弥勒浄土とする信仰があり、経塚が営まれたのである。しかし一方では高野山を極楽浄土とする信仰もあって、これは鎌倉時代以降、多くの高野聖（念仏聖）によって盛んに回国唱導され、高野山奥之院は、念仏と納骨を中心とする聖地となって今日に至っている。奥之院遺跡にみられる納骨用容器、経塚遺物がきわめて類似している点については、今後両者の関係が究明されなければならない。

御廟は小馬蹄形の台地上に営まれているが、昭和52年には御廟台地東側の低地から、53年には東側前方部にある石田三成奉納の経蔵礎石の下から、南宋白磁壺、瀬戸、備前、渥美窯系の納骨壺などが検出された。

また偶然の発見ではあったが、それに対応して調査が計画され、実施された経塚としては、昭和32年田辺市教育委員会が発掘調査を行った仮庵山経塚（伊勢田進 1958）、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した熊野

本宮備埼経塚群がある。後者が本格的に知られたのは、平成元年12月から平成2年2月下旬に実施した、国庫補助事業・東牟婁地方広域遺跡群詳細分布調査によって得られた成果が最初である（黒石 1990）。この調査でA、B両地点に経塚の可能性のある遺構の分布が確認され、とくにA地点は標高158mの頂上付近に位置し、約10m余りの平坦地が見られる。さらに周辺には20～30cmの川原石が散乱し、須恵器の破片なども採集されたことから、備宿の建物跡の可能性も考えられている。C地点からは瓦質の経筒或いは外容器などが採集された。また大黒石と呼ばれる巨大な洞窟の割れ目からは瓦質の土器が採集され、修験関係の修法場と推定されている。また同時に丘陵の高所で、平坦面が確認され、備宿の可能性も指摘した（中村 2002）。その後、当該地域が世界遺産登録のコアゾーンに含まれることから、本格的な調査が行われることとなった。平成13年12月11日から14年2月15日の間、大谷女子大学（現在の大阪大谷大学）によって調査を実施し、第1地点で32遺構、及び第3地点7遺構以上、少なくとも39カ所の経塚遺構を確認した。

さらに今回の報告の対象となった隅田八幡神社経塚がある。

隅田八幡神社経塚は、平成9年度の隅田八幡宮正遷宮に伴って境内整備事業が行われた際、多くを破損した経筒1点（第1経塚出土）が偶然発見された。その報を受けて、県教育委員会と連絡を取るとともに関係者間で対応を協議し、まずは緊急調査により記録保存を図った。しかし複数の経塚の存在が明らかとなり、さらに1基が良好な保存状態を保っていたことなどから、緊急調査では対応しきれなくなったため、平成10年度において本調査を実施することとなった（大岡 1999）。

本調査は平成10年10月12日から実施された。なお経塚発見に至る前は、一辺5m余の正方形に近い四角形に石垣で台地が造り出さ

れ、南側正面の一部を除いて周囲の石垣上に土堀がめぐらされ、その地形は塚状に盛り上げられていた。塚中央の頂上には「元中第二乙丑（1385）五月 日」銘のある宝篋院塔が立つ。経塚の周囲をめぐる石垣の南側は神社本殿と背後の微高地を区画する東西の石垣と共有し、その石垣上には本社が並ぶ。さらに、その背後には社叢がひろがっている。最終的にこの経塚は少なくとも4つの画期があったと考えられている。

第1期

当地に経塚の築造された平安時代末期で第2経塚出土の常滑焼甕、銅鏡等多くの遺物によって裏付けられる。当地域の在地文書である『隅田文書』（和歌山県指定文化財）もこのころからあらわれる。

第2期

瓦器の用いられる13世紀（鎌倉時代）で、弘安10年（1287）から、しばしば法華経供養の行事が行われたことがうかがえる（『隅田文書』）。第2経塚上半の石組の間から瓦器片が出土しており、手の加わったことが推察される。第2経塚が中心となる10尺四方の石組（石垣2）はこの時期の築造と考えられる。

第3期

第1経塚の外容器とみられる備前焼甕の時期である。南北朝時代から室町時代前期で、経塚上の宝篋印塔、正中2年（1385）がこの時期にあたる。この時期は第1経塚がこの中央に位置する形となる。また第3経塚が設けられたのもこの時期と推察される。このとき石垣3が築かれ、3つの経塚が並んだ壇が造られたのとみられる。

第4期

周囲をめぐる石垣（石垣1）の下に江戸時代末期のものとみられる瓦片が入っており、江戸時代に最後の外周石垣が築造され、現在の形となった。

このように隅田八幡神社経塚は、平安時代末期の経塚であることが判明し、当時の遺物

がまとまった形で出土した。またそれぞれの遺構が明らかになるとともに、経塚そのものの調査例は極めて稀で、本調査で得た資料は非常に貴重なものといえよう。

むすびにかえて

以上、和歌山における経塚について、それらの調査研究史について記述してきた。これらからわかる当該地域における経塚は、熊野三山、および高野山地区での営造例は、すべての経塚の典型的な例であることが確認される。那智山地域においては200例を超える経筒の出土がある。しかし熊野・高野山以外の地域での営造例は多くはないといえる。すなわちこれらの地区とりわけ熊野三山地域に集中しているということになる。

ところでわが国にはいかほどの経塚が構築されてきたのだろうか？ 関秀夫（『経塚地名総覧』1984）によると、北海道から鹿児島県に至る各地に経塚が分布しており、その遺跡分布量は1005か所を超え、時期的には平安時代末期から江戸時代まで多種多様である。

いずれにせよ熊野社は全国にネットワークを巡らせており、全国を回遊して経塚誘致に活動する熊野聖の存在があった。高野山についても高野聖の活動があり、彼らが全国を回遊して納骨や経塚営造を勧進した成果が現在和歌山に残されている納骨遺跡であり、経塚遺跡であるといえよう。

【参考文献】

石田茂作 1927「紀伊比井王子神社蔵の経塚遺物」『考古学雑誌』18-9 日本考古学会
石田茂作 1928「那智発掘仏教遺物の研究」『帝室博

物館学報第5』帝室博物館

石田茂作ほか 1975「高野山奥之院の地宝」『和歌山県文化財学術調査報告書』第6冊 和歌山県教育委員会

伊勢田進 1958「^{かりほやま}關鷄神社の仮庵山経塚遺跡」『田辺文化財』2 田辺市教育委員会

伊勢田進 1974「高尾山経塚群」『田辺の指定文化財』1 田辺市

上野元 1958「熊野新宮地域の経塚」『熊野誌』1

大岡康之 1999『平成10年度 隅田八幡神社経塚発掘調査概報』橋本市教育委員会

大場磐雄・小山修三 1970『那智経塚—その発掘と出土品』熊野那智大社

羯正信・吉田宜夫 1973「南海電鉄橋本地区住宅開発計画区域内文化財調査概要」和歌山県教育委員会
羯磨正信・^{こかわうぶずな}壺井公彦 1959『粉河産土神社経塚について』

黒石哲夫 1990『東牟婁地方広域遺跡群発掘調査概報』和歌山県教育委員会

阪田宗彦 2002「東京国立博物館収蔵熊野本宮経塚出土品が語るもの」『大谷女子大学博物館調査報告書』第46冊 大谷女子大学博物館

関秀夫 1984（『経塚地名総覧』ニューサイエンス社
関秀夫 1985『経塚遺文』東京堂出版

巽三郎・上野元 1863『熊野新宮経塚の研究』熊野神宝館

巽三郎ほか 1953『願成寺発掘調査報告1』願成寺

巽三郎 1957「新宮神倉山経塚発掘調査報告、『考古学雑誌』42-4 日本考古学会

東京国立博物館 1985『那智経塚遺宝』東京国立博物館

中村浩ほか 2002「熊野本宮備埼経塚群発掘調査報告書」『大谷女子大学博物館調査報告書』第46冊 大谷女子大学博物館

和歌山県 1983『和歌山県史』考古資料 和歌山県